

批評と紹介

許宏著

『大都無城——中国古都の動態解読——』

黄川田 修

一・序言

古代中国の都城遺跡を、中国内外の歴史学、考古学の多くの専門家が長年にわたり重視してきた事は、ここに贅言するまでもない。しかし一方で都城に関する論考が毎年のように発表されるものの、網羅的にこれらの遺跡を考察したまとまった研究成果がどれだけ有るか考えると、実は意外なほどに少ない。殊に、中国内外の関連する研究蓄積を正確に把握し、更に考古学資料と古文獻の両面から十分な分析を行った著作となると、『中国古代を掘る——城郭都市の発展——』（杉本憲司一九八六）、『中国の城郭都市』（愛宕元一九九一）、『後漢魏晋南北朝都城境域研究』（塩沢裕仁二〇一三）など数冊にとどまるだろう。

一般に広く利用されてきた代表的な専著としては、一九八〇年代後半に出版された『中国都城の起源と発展』（楊寬一九八七／以下『起源』と略称）を挙げるべきだろう。後に中文版（『中国古代都城制度史研究』一九九三）も出版された同書は、新石器時代の関連情報が少なすぎるという問題はあるものの、中国最初の統一帝国の成立の前後、殷周時代から隋唐時代を中心に当時知られていた主要遺跡を全て網羅している。加えて、楊氏の明確な歴史観に基づいた都城の発展過程の説明、そして関連する詳細な情報および考証が記されており、今なお学問的価値が高い。

しかし、『起源』は一九八〇年代の著作であり、情報が古くなりつつあるという欠点が否めない。十数年前、そこに登場したのが許宏氏による『先秦城市考古学研究』（二〇〇〇／以下『先秦』）であった。『先秦』は出版当時に公表されていた、新石器時代から戦国時代までの中国古代都城に関するデータを網羅的に集成し、そのデータを駆使しながら、都城の変化を中国古代史の発展の中に位置づけ、論述した大作である。しかし、収録された遺跡数があまりに多く（総計五〇七カ所）、また、これまで中国古代都城研究の歴史の中で提起された多数のテーマを一つ一つ整理しながら論述している。日々、中国語論文を読みこんでいる考古学者ならばともかく、それ以外の専門家や学生、特

に中国語圏以外の各国読者にとっては、正確に読解するには骨が折れる書籍である。

そこに登場したのが本稿で紹介する、同じ許氏による新著『大都無城——中国古都の動態解読——』（二〇一六）である（以下〈本書〉）。『先秦』は全三〇万字の大著であったが、対して本書はB六判二五一ページ、十万字余という比較的コンパクトな書である。また〈大都無城〉という許氏の唱える新説（後述）をテーマとして、主要な都城遺跡のみを選択し考証するという（つまり、正式な報告書が未刊行である遺跡はほぼ全て省略されている）、前著とは対照的な体裁を採用している。このように非常にシンプルな構成、内容のため、きわめて読み易い体裁となっている。中国古代都城の考古学に対する入門書として、現時点でもっとも初学者に適した書と言えるだろう。また、本書は考古学や歴史学の専門家だけではなく、華人社会全体の読書人たちからも広く注目されており、二〇一七年八月現在、学術書としては異例の二万部を売り上げているという¹⁾。

以下、本書の内容を読者各位に紹介し、併せて評者の意見を述べてみたいと思う。

二・本書の内容

最初に、本書成立の背景を理解するための一助として、

著者の経歴について簡単に述べたい。許氏は遼寧省出身、一九六三年生まれ。山東大学考古系、同修士課程を修了後、中国社会科学院（以下〈社科院〉）附属大学の博士課程に進んだ。学位取得後はそのまま考古研究所（以下〈考古所〉）に残り、研究に従事している。現在まで約二〇年にわたり、〈夏王朝〉首都の候補地として著名な偃師二里頭遺跡の考古隊長を務め、同遺跡の発掘・報告書編集の指揮を執っている。上記の経歴が示す通り、文字通りの発掘現場（叩き上げ）の考古学者である。その一方で、近年は社科院考古所の夏商周研究室主任、社科院附属大学院教授も兼任している。周知のように許氏は日本語の堪能な知日派であり、度々日本側に招かれて訪日し、各地で学術会議等に参加しているので、読者各位の中にも直接面識がある方が多数いらっしゃるだろう。

本書には、中国初期王朝時代の都城遺跡に関する、欧日中各言語のさまざまな論文、発掘報告書が幅広く渉猟され、適切に消化された上で議論の材料となっており、読者を敬服させるに十分な議論を行っている。これは勿論、許氏の資質に拠るところも多大であるが、別の要因として、中国考古学研究の国際的センターである考古所に長年にわたって勤務し、海外専門家との共同研究に数多く参加してきたという経歴もまた大いに関係しているように思う。その意味で、本

書は中国考古学研究の最新の潮流を反映している興味深い著作とも言える。

続いて、以下では各章の内容を整理して読者に紹介したい。

引子（不是〈無邑不城〉嗎？／不得不弁的城郭名実／大家曾怎麼說／城郭形態千年觀／文獻的視角…大邑無城埔）

〈序章〉として、許氏は関連する過去の議論を整理し、その上で中国都城の〈宮城〉〈郭〉の両者を定義する。即ち、〈宮城〉は過去の諸家が〈小城〉あるいは〈内城〉とも呼ぶ、「多くが貴族あるいは統治者によって占められる」（本書九頁）区域を意味する。そして〈宮城〉区を取り囲む、或いは〈宮城〉と離れて存在する、①一般の都市住民の住宅区、②手工業工房区、③墓地の空間、これら①—③の総称が〈郭〉であり、この郭を取り囲んで築造された防衛施設が〈郭城〉である。ここで許氏は読者に、本書の主なテーマとなる仮説を提示する。即ち「古代中国の都市は居住区が城壁で囲われていた」とする過去の通説と異なり、二里頭期から漢代に至る約二千年間、中国の主要な都城では郭区に城壁が見られない（〈大都無城〉）、つまり〈大ナル都ニ城ル無シ〉^{（2）}こそが常態だったのではないか——という見方である。続いて、本仮説に関連する議論を行った、俞偉超・徐苹芳・楊寬・劉慶柱各氏の中国古代都城に對す

る見解、そして先秦期の〈邑〉字に對する馮時氏の見解を紹介し、それぞれに許氏自身の考証を加えている。

第一章 魏晉以降 城郭里坊（魏晉至隋唐／宋元明清）

魏晉南北朝時代から清代に至る、中国の主要な都城について、①城郭全体の平面構造、②中軸線の有無、③里坊制の規格、これらの諸点から分析を行っている。とりあげられる主要な都城は、鄴城（曹魏）・洛陽（北魏）・長安（唐）・汴梁（宋）・北京（元明清）である。近年の各地の考古隊による発掘成果を引用しつつ、これらの都城の特徴を説明した後に、本章の結論として「先秦および秦漢の〈大都無城〉時期を経て、魏晉から明清期に至って中国は漸く〈無邑無城〉（全ての市街区を城壁が囲む）時代となった」（本書三五頁）、と主張する。

第二章 秦漢京畿 帝国霸氣（西漢長安…城郭之弁／秦都咸陽…有城還是無城／東漢洛陽…最後の無郭之都）

本章は先ず古代中国都城の完成形として前漢期の長安城（現陝西省西安市）の遺跡群をとりあげている。

本章での核となる内容は、一九八〇年代から九〇年代にかけて起こった、楊寬氏（元復旦大学教授）と劉慶柱氏（元社科院考古所所長）による著名な學術論争の紹介と、それに対する許氏の見解である。周知の如く、長安城ではこれまでに未央宮・長樂宮などの宮殿遺跡、そしてこれら

を囲む城壁遺構が確認されている。この城壁内側の区画に對し、楊寬はこれを「宮城区」と定義し、一般都市住民の居住する「里」、そして商業活動が行われた「市」の大部分が「宮城区」の外に広がっていたと主張した。これに對し、一九九〇年代に長安城考古隊を率いた劉慶柱は楊説を全面的に否定する。劉氏は長安城の既知の城壁遺構を「郭城」と断定し、「市」もまた「郭城」内側にあった筈だと主張する。

本章前半で許氏は先ず楊・劉両氏の論争の論点を整理し、関連する遺構、文献を再考証した後に、楊氏の見解が正解であったと結論づける。続けて、許氏は長安城の都市設計プランに見られる中軸線の問題について言及し、劉瑞氏の近著『漢長安城的朝向、軸線与南郊礼制建築』（二〇一二）の研究成果を肯定的に引用しつつ、築城当初は「坐西朝東」（都市西部に主要建築が配置され、東に向かって中軸線が伸びる）であったのが、前漢末期から後漢初頭には「坐北朝南」（都市北部に主要建築が配置され、南に向かって中軸線が伸びる）へと変質し、それが後漢洛陽城の平面構造に引き継がれたと結論づける。

本章後半では、許氏は更に秦の咸陽城と後漢洛陽城の現在までの考古学調査の進展を紹介し、咸陽城の都市プランと長安城との間の継承関係は不明としつつ、一方で洛陽城

は長安城から継承した明確な特徴、つまり宮城区に城壁があり、郭区の城壁は見られないことを指摘し、後漢の洛陽城を「大都無城」の最後の都市と位置付ける。

第三章 東周城郭 乱世独作（内城外郭話春秋／城郭並立 惟戰國／西土模式看雍城）

東周時代の列国の主要都城についての近年の考古学研究の成果を紹介し、併せて各都城の平面構造の特徴について許氏が見解を述べる。許氏が行った考証の詳細は省略し、ここでは評者が最も興味深く覚えた論点を紹介したい。許氏は、この時期の中国の都城の平面プランに、二つ、或は三つ以上の方形の城壁が連結した例がたいへん多く（本稿では、評者は仮に「城郭併結制」と呼称したい）、この現象を過去の多くの研究者が「夏商周」から漢代へ繋がった、都市発展の一つの過渡期として把握したことを紹介した上で、彼らの見解を否定している。続けてこれら東周都城の平面構造の特徴は「この時代に突然発生し、しかも継承されずに断絶した要素である。特定の時代に誕生したものに過ぎず、都邑の単線的な発展過程の一部、とは考えにくいのではなからうか」（本書七四頁）と主張している。読者をやや困惑させる大胆な見解であるが、しかし一方で評者の見る限り、確かに許氏の提示するデータを一つずつ見てゆくと、或は許氏の仮説が妥当ではあるまいか、と思わせ

られる。

第四章 三代大都 王国孔武（春秋…〈大都無城〉）の子遺／西周…〈守在四夷〉の自信／殷墟…重啓數百年（無城）時代／二里岡…城郭（帝國）二百年／二里頭…〈大都無城〉の肇始）

前章で東周時代の〈城郭併結制〉に該当する都城を中心に考察を進めた許氏は、本章では〈大都無城〉の特徴を色濃く持つ事例を集成し、検討する。二里頭期から西周時代（前十九世紀～前八世紀）の主要都城、および春秋時代に相当する諸遺跡である。

興味深いのは、許氏は二里岡期の中国社会について、鄭州商城を首都とする中央集権的な〈帝國〉が成立したとする孫華氏、劉莉女史の見解を紹介している点である。その上で、当時の社会は「軍事要素の影響が濃厚」（本書一六九頁、原文…軍事攻防濃烈…）であり、前後の二里頭期、殷墟文化期それぞれとは異なる時代だと位置付けている。そして二里岡期の諸遺跡はこの時代の特異な目的のため宮城区の周囲に或は城壁を、或は堀を設けていた事についても述べた後に、これら二里岡期の諸城は〈大都無城〉とは異なる設計プランに基づいて建造された、と主張する。

余論…晩出の大中軸線

本書の諸考察の総括として、初期王朝時代から前漢期に

かけての中国都城、特に諸侯国の都、王朝の都の都市計画の特徴を整理した上で、漢代以降の中国都城の平面構造について述べている。もともと注目されるべきは、隋唐長安城に代表されるような、南北の中軸線の東西に、明確な左右対称の平面構造をもつ都城プランについて、許氏が「大都無城の思想が消えた後の産物にしか過ぎない」（本書二二〇頁）と断言している点であろう。近代以前の中国都城制度に関わる重要な提言であり、今後関連する議論が行われることを期待したい。

三・評者が感じた疑問

以上が本書の主な内容であるが、その考証過程の一部には、評者個人としては些か疑問が有る。以下、その中から二点を選んで整理し、許氏および読者各位に提示したい。

第一に、南北朝時代～清代の都城に対する議論。上記の時代、一五〇〇年以上の中国都城の歴史について、許氏は鄭城・洛陽・開封・北京の四カ所の帝都についてのみ詳しい説明を行っているが、これは検討事例が少なすぎる印象を受ける。確かに本書は初期王朝時代から漢代をメインとする、概説としての性格の強い著作である。とは言え、せめて分裂期の主要都城（南北朝期の北魏の平城、同南朝の建康、五代期の成都及び番禺、南宋期の臨安、等）につい

ては、近年の考古学研究の成果を読者に提示するべきではなからうか。

第二に、鄭州商城（前十六世紀末～前十四世紀頃）に関する議論である。許氏の仮説によれば、二里頭期（前十九～前十六世紀頃）以降は〈大都無城〉思想が中華文明に出現していたのにも関わらず、その一方で鄭州商城は前代の二里頭遺跡、後代の殷墟遺跡と大きく異なり、明確に宮城区を囲む城壁が築かれていた事になる。またそれにとどまらず、同遺跡には〈郭城〉として理解が可能な、宮城外側に位置する城壁遺構も築かれている。〈大都無城〉と矛盾する、読者を困惑させる現象と言わざるを得ない。

前節で引用の如く、許氏は孫氏、劉女史の〈鄭州帝国説〉を引用し、軍事的緊張の高まった時代の産物として鄭州商城の宮城、郭城の出現を説明しようとしている⁴。しかし評者は以下のような疑問を覚える。何故当該時期の他の城壁遺構が晋南豫西にのみ集中するのか。一方、二里岡文化の集落遺跡が多数出現した魯西・冀・蘇北・陝南では、中原系と土着系の両集団の間で緊張が高まったと推測されるにも関わらず、何故これらの地域では城壁遺構が全く発見されていないのか。城壁遺構の出現は軍事的要素だけで説明できるのか。これらの問題に対し、〈大都無城〉説は未だ十分な説得力を持ち得ていない。評者は許氏に対し、将来

稿を改めて当該問題を議論されるよう切望する。

四・殷周考古学の研究史から見る

本書の意義

以上、幾つかの問題を評者は、或は必要以上に細かく論じてしまったかもしれない。しかし一方で、これらの問題はいずれも小さな瑕疵であり、本書の価値を些かも貶めるものではない。そして評者の見る所、前節で述べた鄭州商城の城壁遺構は、許氏が主張するように何らかの特殊な時代背景によって生まれた〈例外〉として把握すべきであり、本書の提示する仮説〈大都無城〉説は、総体的に見ておそらく正鵠を射ているだろう。その理由を以下に記したい。

何故現代に至るまで、二里頭、殷墟、大周原など、中国初期王朝を代表する都市遺跡では城壁が確認されないのであろうか。この問題について、一九九〇年代前半までは〈大都無城〉とは別個の解釈も可能であった。つまり〈未だ発見されていないだけだ〉と見るのである。評者が大学に入り（一九九〇年）、中国考古学の基礎を学び始めた当時は、そのような解釈が比較的説得力を持ち得ていた。当時の中国は、各省・自治区の考古研究所、そして各大学の考古研究室はいずれも研究人員、予算がたいへん少なく、彼らが行った発掘調査も非常に限られていた。だからこそ

	従来の慣習的な呼称	本書中での呼称
(1)	洹北商城	殷墟洹北城
(2)	殷墟遺址	殷墟洹南大邑
(3)	鄭州商城	鄭州城
(4)	偃師商城	偃師城

《未発見》という解釈も存在できる余地があったのである。しかし、二十一世紀に入って各地の考古研究所・考古学研究室が毎年のように初期王朝期の都城に対して発掘を行い、発掘報告を公表するようになると、もう《未発見》と見なす余地は少なくなつた。つまり、毎年のように新石器時代および漢代以降の城壁遺構発見のニュースが伝えられる一方で、初期王朝の《王都》と目される諸遺跡では、一部の例外を除き、城壁が発見されないままなのである。更に一步進めて言えば、これらの遺跡では城壁が《未発見》ではなく、もともと《存在しなかった》可能性が強まったのである。許氏が本書で提示した《大都無城》は、過去一世紀にわたる中国大陸の無数のフィールドワークの成果に照らせば、最も妥当な仮説だと言わざるを得ない。我々は今後、《大都無城》に同意・不同意いずれかに関わらず、本仮説を出発点として初期王朝の都城に対する更なる考察を行うべきであろう。

また、本書の中で許氏が自身の専門である初期王朝期の諸遺跡の呼称につ

いて、自己の歴史観に基づいて再定義を行っている事も重要であろう。これは既に出版されている許氏の他の著書『最早の中国』、『何以中国』にも見られる手法であるが、本書では一層鮮明となつている。試みに上に表としてみた。

(1) (2) に対する許氏の見解は、所謂《中商文化説》に対する明確な意見表明である。広く知られるように、二〇世紀末に安陽の洹河北岸で発見された遺跡群に対し、当時殷墟遺跡調査隊を率いていた唐際根氏は従来の殷墟遺跡群とは異なる遺跡群だと主張した。そして後者を《晚商文化》と呼称した上で、後者と鄭州商城末期の遺存を《中商文化》と定義したのである。この唐氏の見解に対して許氏は、本書の中で洹河北岸、南岸の両遺跡群を、全て《殷墟遺跡群》として定義した。これは、一九二〇年代からの学史の流れを尊重した、一つの独自の見解として注目されるべきだろう。また、(3) (4) に対する許氏の見解については、遺跡名の表記を見れば一目瞭然であろう。つまり、筆者個人の理解に基づいて言い換えれば、以下のような主張である。

「出土文字による証明がなされない限り、各都城がいずれの王朝に属するものか断定すべきではない。従つてこれらの遺跡名に《商》の一字を加える事は不要である」

評者は自省もこめて、許氏の主張に全面的に賛意を表したい。

五・余 論

本稿は以上ではほぼ紙幅が尽きたが、上記の議論の他にも、幾つかの興味深い関連テーマがある。例えば、日本を含めた中華文明周辺地域の初期の都城制度は、本書が提示した〈大都無城〉とどのように関連しているのか、という問題である。また、インド文明圏と中華文明圏の初期都城プランが相互に影響しているという観点が一部の学者によって提示されているが、この問題と本書の〈大都無城〉説はどのように関連しているのだろうか。〈大都無城〉の発展過程は中国在地の要素だけで説明できる現象なのだろうか。右の諸問題については、他日稿を改めて議論する事としたい。

以上、許氏の新著『大都無城』について、紹介および関連する見解を述べた。評者は自らの浅学非才により、紹介および議論の一部に誤りがないかと恐れている。許氏および読者各位からご叱責、ご批判を頂ければ幸いである。

補記・本稿の執筆中に、蔣天穎氏による本書の書評、「城郭形態視角下的都邑動態觀察——評許宏《大都無城》」

——が『文物春秋』二〇一七年三期にて公開された。また、本書冒頭で触れた『先秦』を許氏が全面的に増補改訂した『先秦城邑考古』が、二〇一七年十二月に金城出版社、西苑出版社の二社から出版された。本書評と併せて参照頂ければ幸いである。

註

(1) 二〇一七年八月、北京にて評者が許氏に会った際に得た消息による。

(2) 評者による試読。

(3) a 孫華・「商代前期的国家政体——從二里岡文化城址和宮室建築基址的角度」『多維視域——商王朝与中国早期文明研究』、科学出版社、二〇〇九年。

b 劉莉・「中国早期国家政治格局的变化」『多維視域』(同前)。

(4) 周知の如く、初期王朝期の中国の社会構造については、百年以上に及ぶ中日欧各言語圏それぞれの膨大な研究の蓄積がある(左掲の拙文を参照)。評者の見る所、孫氏・劉女史の議論は過去の研究史に対する理解および議論が不十分であり、両者が提示した仮説は成立困難であらう。

黄川田修・「華夏系統国家群之誕生——討論所謂〈夏

商周〕時代之社会結構——」、中国社会科学院考古研究所(編)『三代考古』三、二〇〇九年。

(5) 応時利明・「アジアの都城とコスモロジー」、布野修司(編)『アジア都市建築史』昭和堂、二〇〇三年。

許宏『大都無城——中国古代的動態解讀——』B六判、生活・読書・新知三聯書店、二〇一六年、二五一頁。

(台湾大学人類学系兼任助理教授)